

小 学 校

令和7年度

教育研究員研究報告書

特別の教科 道徳

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	2
IV	研究構想図	3
V	研究内容	4
	1 基礎研究	4
	2 実践研究	
	〈検証授業1：第1学年〉	7
	〈検証授業2：第4学年〉	10
	〈検証授業3：第1学年〉	13
VI	研究の成果と課題	16

研究主題

自己の生き方についての考えを深める児童の育成

～児童の問題意識を生かす工夫、

多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫～

I 研究主題設定の理由

グローバル化の進展や、Society5.0を視野に入れたデジタルトランスフォーメーション(DX)の加速、生成AIの活用などにより、持続可能な社会を目指す取組が進められている。このような変化を踏まえ、学校においては、人が互いに尊重し協働して社会を形作っていく上で共通に求められるルールやマナー、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合い、他者との望ましい関係性を築いていこうとする意識や態度を育てていくことは、これまでも増して大切であると考えます。

そのためには、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする道徳教育の充実を重視する必要があります。とりわけ、道徳教育の要と言われる特別の教科「道徳」(以下、「道徳科」と言う。)は、その役割のもと、学校の教育活動全体で行われる道徳教育と関連して効果的に機能するよう、教師による不断の授業改善が求められているところである。

道徳科の授業の一層の改善に向けて、小学校学習指導要領に示された道徳科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」ことを話し合いの切り口として、研究の方向性について検討を進めた。

話し合いにおいては、児童が他人の言葉に流されたり、自分の思いや考えをもてなかつたりする姿が見られることや、社会に情報があふれる時代に、「自分はどうか」、「自分にとってよりよい生き方とはどのような生き方なのか」、「どのように社会や集団と関わっていくとよいのか」といった問いに対する自分なりの答えを模索する機会を作り出すなど、自分の生き方を考える機会の充実が必要ではないかなどの意見が交わされた。そこで、道徳科の目標にある「自己の生き方についての考えを深める」という学習活動に着目し、議論を続けた。その結果「自己の生き方についての考えを深める」学習活動を充実させることで、児童は、自分自身のことについて考え、道徳性が一層育まれるのではないか、と考えた。

また、どのような視点で研究を進めていくか、明確になるよう研究副主題も設定することにした。

Ⅱ 研究の視点

1 児童の問題意識を生かす工夫（視点A）

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編では、自己の生き方についての考えを深めるためには、「児童が道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められるようにする」ことが例示されている。

本研究においては、道徳的価値に関する事象を自分自身の問題として捉えさせ、児童一人一人がもつ問題意識を授業に生かした工夫の有効性について検証していく。

その際、具体的な手だてとして次の3点について基礎研究を踏まえ検討していく。

- (1) デジタル機器を活用した教材等の提示
- (2) 児童の問題意識を生かした発問の構成
- (3) 児童が自分の問題意識の振り返り

2 多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫（視点B）

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編では、自己の生き方についての考えを深めるためには、「他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする」ことが例示されている。

本研究においては、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解させ、多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫の有効性について検証していく。

その際、具体的な手だてとして次の2点について基礎研究を踏まえ検討していく。

- (1) 意見を分類・整理し、共有
- (2) 目的に応じた話合いの設定

Ⅲ 研究仮説

教師が児童の問題意識を生かす工夫や多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫を行うことにより、児童は多様な感じ方や考え方を基に自己を見つめ、これからの課題や目標を見付けようとするだろう。

IV 研究構想図

【教育研究員 共通研究テーマ】

全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現

【現状と課題】

- 1 社会的背景と道德教育の役割
持続可能な社会に向けて変化していくなか、学校においては、児童にルールやマナー、他者との望ましい関係性を築くため、道德教育の充実として道德科の授業改善が求められる。
- 2 小学校における児童の姿や、道德の授業の状況
他人の言葉に流されたり、自分の思いや考えをもてなかつたりする姿が見られる。
「自分はどうかしたいか」など、生き方を考える機会の充実が必要である。

【研究主題】

自己の生き方についての考えを深める児童の育成

～児童の問題意識を生かす工夫、多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫～

【目指す児童の姿】

多様な感じ方や考え方を基に自己を見つめ、これからの課題や目標を見付けようとする児童

【研究の仮説】

教師が児童の問題意識を生かす工夫や多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫を行うことにより、児童は多様な感じ方や考え方を基に自己を見つめ、これからの課題や目標を見付けようとするだろう。

【研究の視点】

1 児童の問題意識を生かす工夫（視点A）

- (1) デジタル機器を活用した教材等の提示
- (2) 児童の問題意識を生かした発問の構成
- (3) 児童が自分の問題意識の振り返り

2 多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫（視点B）

- (1) 意見を分類・整理し、共有
- (2) 目的に応じた話し合いの設定

【研究の内容】

- 1 基礎研究
国や都等の先行研究・文献の分析を通して、次の点について定義する。
 - (1) 「自己の生き方についての考えを深める児童」について
 - (2) 「児童の問題意識を生かす工夫」、「多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫」について
 - (3) 一単位時間における手だての位置付けについて
 - (4) 検証方法について
- 2 実践研究
 - (1) 研究の視点についての検証授業を行う。
部員が集まって行う検証授業は、第1学年で2回、第4学年で1回とする。
 - (2) 検証の方法
 - ア 検証内容
「児童の問題意識を生かす工夫」「多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫」
 - イ 検証方法
 - ① ワークシートの記述の分析
 - ② 児童の自己評価の分析
 - ③ 児童の学習の観察

【研究のまとめ】 研究の視点で示した2点の工夫の有効性についてまとめる。

V 研究内容

1 基礎研究

(1) 「自己の生き方についての考えを深める児童」について

道徳科における「自己の生き方についての考えを深める」とは、児童の道徳性の形成を支える学習活動と言える。小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編では、「自己の生き方について考えを深める」ことについて、次のように示されている。

児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。(中略) 例えば、児童が道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められるようにする。また、他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにすることなどが考えられる。

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 P. 15

このことを踏まえ、本研究では、具体的な手だての有効性を把握していくために、自己の生き方についての考えを深める児童の姿として、「児童が自己の価値観や経験、他者の考えにも触れて再構築した考えを基に、自己を振り返り、これからの自分の課題や目標を見いだそうとしている。」として捉えることにした。

(2) 「児童の問題意識を生かす工夫」、「多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫」について

自己の生き方についての考えを深める児童を育成していくために、研究の視点で示した、「児童の問題意識を生かす工夫(視点A)」と「多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫(視点B)」について捉え、手だてを具体化していく。

ア 児童の問題意識を生かす工夫(視点A)

一般的に、問題意識とは、「ある事態などに対し、その重要性を見抜いて、主体的にかかわり合おうとする心の持ち方。また、その内容。」(出典：小学館デジタル大辞泉)とされている。

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編では、「問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を理解し、自己を見つめ、多様な感じ方や考え方によって学び合うことができるのかを具体的に予想しながら、それらが効果的になされるための授業全体の展開を構想する。」と示されており、学習指導過程の構想には、児童の問題意識を大切にすることが求められていることが分かる。

本研究では、児童に問題意識をもたせた上で、教師が問題意識を生かしていくことが重要と考えた。そこで、教師によって児童の「問題意識を生かしている」状態を、「日常生活や教材に対する興味関心や疑問をもち、それを自分事として捉え、その解決や改善に向かおうとする心の持ち方や考え方」と捉えることにした。そして、問題意識を生かす工夫を次の3点とした。

	内容	期待する効果
デジタル機器を活用した教材等の提示 教材等の提示	デジタル機器を活用して、事前アンケートの結果や、教材等を提示することで、児童の問題意識を顕在化させ、生かしていく。	児童が、道徳的価値に関わる事象を自分事として捉えやすくなり、「考えたい」という思いが高まる。
児童の問題意識を生かした発問の構成 発問	児童が考えたいことを取り上げるなど、児童の発言を基に発問を構成する。	児童は考えたいと思った問いを見付けたり、追求したりすることができる。
児童が自分の問題意識を振り返る工夫 振り返り	授業の過程（導入や展開）で明らかになった児童の問題意識を踏まえて、振り返りの問いにする。	児童は学習活動での思考の流れを意識して振り返ることで、自分の生き方と結び付けて考えやすくなる。

イ 多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫（視点B）

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編には、自己の生き方についての考えを深める具体として、「他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする」ことが例示されている。児童が多様な感じ方や考え方に触れることは、物事を多面的・多角的にみる視点を広げ、自分の考えを再構築する契機につながるといえる。

このことを踏まえ、本研究では、多様な感じ方や考え方を、「ある事象に対して、人それぞれが異なる受け止め方や価値観」と捉え、研究を進めることにした。

そして、多様な感じ方や考え方に触れさせるための手だての工夫を次の2点とした。

	内容	期待する効果
児童の意見を分類・整理し、共有する工夫 整理・共有	教師が板書やデジタル機器などを活用して、児童の意見を分類・整理し、学級全体で共有できるようにする。	児童は、多様な考えを視覚的に捉え、理解しやすくなる。
目的に応じた話合いの設定 話合い	考えを出し合う、比べる、つなげるなど、目的に応じた話合いができるようにする。	目的に応じた効果的な話合いを行うことで、考えをまとめたり、比較したり、つなげたりしやすくなる。

(3) 一単位時間における手だての位置付けについて

「児童の問題意識を生かす工夫」と「多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫」を一単位時間の中に取り入れるタイミングは、次の場面での活用を基本として、取り組むことにした。

	視点A	視点B
	児童の問題意識を生かす工夫	多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫
導入	【教材等の提示】 デジタル機器を活用した教材等の提示	
展開	【発問】 児童の問題意識を生かした発問の構成	【整理・共有】 意見を分類・整理し、共有する工夫
	【振り返り】 児童が自分の問題意識を振り返る工夫	【話し合い】 目的に応じた話し合いの設定

ねらいや教材等によっては、視点Aと視点Bに記載した工夫の順序が、入れ替わることや連続することも考えられる。

(4) 検証方法について

ア 検証内容

「児童の問題意識を生かす工夫」（【教材等の提示】、【発問】、【振り返り】）、
「多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫」（【整理・共有】、【話し合い】）
の5点の工夫について、その有効性について検証する。

イ 検証方法

検証内容は、その効果が相互に関連することから、工夫ごとに児童の学習状況を把握するのではなく、以下の方法により、授業ごとのねらいや学習活動に応じて、総合的に学習状況を把握し、それぞれの工夫の効果について考察していく。

(ア) ワークシートの記述の分析

児童の記述内容について分析する。

(イ) 児童の自己評価の分析

児童に自己評価の結果を分析する。

なお、評価項目は、視点A（児童の問題意識を生かす工夫）と視点B（多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫）と関連付けた質問とした。また、「よくできた。」（◎）、「まあまあ、できた」（○）、「あまりできなかった。」（△）の3段階とした。

	低学年	高学年
視点Aと関連	考えたいことを見付けた	問題意識をもつことができた
視点Bと関連	友達の考えから気付いた	友達の考えから気付きがあった

(ウ) 児童の学習の観察

検証授業における児童の学習状況を観察し、分析する。

2 実践研究

<検証授業1：第1学年>

- (1) 主題名 「わがままをしないで」 A 節度、節制
- (2) ねらい わがままな行動や自分勝手な行動をしない生活をしようという心情を育てる。
- (3) 教材名 「かぼちゃのつる」
- (4) 研究の視点

	工夫	手だて
視点A (問題意識)	【教材等の提示】	導入では、「好きなことをしているとき、どんな気持ちになりますか。」と発問することで、教材の登場人物の気持ちに自我関与し、自分のこととして考えやすくする。
	【発問】	教材提示後に、心に残った場面を児童に尋ねる。「あるある」「なんで」「いいね」「こころにのこる」の四視点を基に考えることで、教材を自分のこととして考えられるようにする。
	【振り返り】	教材を通して考えた後に、「好きなことをするときには、どんなことに気を付けるといいと思いますか。なぜそう思ったか、理由も考えましょう。」と問うことで、自分の経験と照らし合わせて、自己を振り返ることができるようにする。
視点B (多様)	【整理・共有】	一人一人の感じ方の違いに触れさせるために、デジタル機器（ハッピーメーターを使用する。ハッピーメーターとは、デジタル機器上で気持ちをうれしい・楽しい⇔よくない・いや等を色で指標する）で考えを共有し、それを基に自分と似た考えや違う考えを確かめられるようにする。
	【話し合い】	教師がデジタル機器で意見を確認しながら意図的に児童を指名し、発言させることで、多様な意見に触れられるようにする。

- (5) 学習指導過程

	主な学習活動 (○発問 ◎中心発問)	◇指導上の留意点 ★評価の視点
導入	1 自分の経験を振り返る。 ○好きなことをしているとき、どんな気持ちになりますか。	◇好きなことをしている楽しい経験を振り返らせることで、かぼちゃの気持ちに共感できるようにする。【教材等の提示】
	好きなことをするときには、どんなことに気をつけたらいいだろう。	
展開	2 教材「かぼちゃのつる」を読んで話し合う。 ○お話を聞いて、自分にも同じようなことがあったと思う場面や心に残った場面はありましたか。 ・かぼちゃさんは、なんでみんなから注意されてもやめなかったのかな。 ・つるが切れてしまって、かわいそう。	◇児童の心に残るように、デジタル機器を使い、教材の読み聞かせを行うことで、問題意識がもてるようにする。 ◇自分との関わりで教材を捉えることができるために、「あるある」「なんで」「いいね」「心に残る」の四視点で考えさせる。【発問】

	<p>○つるを伸ばしているときのかぼちゃの気持ちをハッピーメーターに表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つるをたくさん伸ばせて、楽しいな。 ・みんなから注意されるのが、嫌だな。 ・周りのみんなが困っているから、よくないかな。 <p>◎つるを切られてしまったあと、かぼちゃはどんなことを考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・痛いよう。 ・つるを伸ばさなければよかったな。 ・みんなの言うことを聞いておけばよかった。 <p>3 自分自身の思いや考えを見つめる。</p> <p>○好きなことをするときには、どんなことに気を付けるといいと思いますか。なぜそう思ったか、理由も考えましょう。</p>	<p>◇デジタル機器を使い、登場人物の気持ちを考え、児童一人一人の考えを共有できるようにする。【整理・共有】</p> <p>◇児童の様々な考えを取り上げることで、多様な感じ方、考え方に触れながら、話合えるようにする。【話し合い】</p> <p>★わがままに振る舞ったかぼちゃの行動を振り返ろうとしていたか。（発言）</p> <p>◇導入で考えた思いと比べながら、自己の経験を振り返ることができるようにする。【振り返り】</p>
終末	4 教師の説話を聞く。	

(6) 検証

ア 学習状況

(ア) 中心発問におけるワークシートの記述

【児童の記述内容】

- 注意されていたときに、やめておけばよかった。
- つるを伸ばしすぎてしまったから、みんなを困らせていたかな。
- つるを伸ばしたのは、楽しかったけど、早くやめるとこんな痛い思いはしなかった。
- つるが切れてしまって、痛い。これからは、みんなのことを考えてつるを伸ばそう。
- 迷ったときに、やめればよかった。
- 注意されたときにどうしようかと思ったけど、よくなかったと分かった。
- もっとつるを伸ばしたかった。
- なんで、切られてしまったんだろう。
- つるを車でひくなんてひどい。

(イ) 児童の自己評価の集計（※本学級児童数 30 人中）

項目	◎	○	△
① 考えたいことを見つけた（視点Aと関連）	11人	6人	13人
② 友達の考えから気付いた（視点Bと関連）	7人	4人	19人

(ウ) 抽出した児童の学習状況

	授業の様子	自己評価の結果	振り返りの話合い
A 児	教材を提示した後に、「なんで」という疑問について考えていた。	「①◎、②○」であった。	「道徳の授業の中で、自分が考えたいことや気になることはあまり見付からない」と話していた。
B 児	教材提示後に「なんで」「心に残る」について考えていた。	「①○、②△」であった。	「(つるを) 伸ばしすぎなければよかった」と発言した。

イ 考察

【教材等の提示】

中心発問に対して、児童から「つるが切れたとき、心が痛くなった。みんなのことを気にせずに、つるを伸ばしすぎて、悪かったな。」「好きなことだけをしていたら、罰が当たった。」という発言があった。これは、導入時に、「好きなことをしているときに、気を付けることは何か」と問い、考えさせたことが、教材における登場人物の気持ちを自分のこととして考えることにつながったと考えられる。

【発問】

抽出児童2名は、教材に対して自分の気付きや思いを表出していたことから、問題意識を生かした思考ができていたと考えられる。

【振り返り】

自己評価において「考えたいことを見付けた（視点Aと関連）」と「友達の考えから気付いた（視点Bと関連）」で、△を付けた児童が、◎や○よりも多かった。このことから、自分のことについて考えることが十分ではなく、手だての効果が低かったと推察される。その原因として考えられることは、「考えたいことを見付けた（視点Aと関連）」においては、ねらいと内容等を踏まえ発問の精選が不十分であった。そして「友達の考えから気付いた（視点Bと関連）」においては、児童同士の話合いが十分に設定できなかったことが原因ではないかと考えられる。

【整理・共有】

「ハッピーメーター」の活用によって、同じ色であっても、色の濃さによって少しずつ考えが違うことを視覚的に確かめる様子が見られた。また、視覚的に多様な考えに気付くことができたことから、児童は、「迷った」、「どうしようかと思った」など、思考を深める機会となっていたのではないかと考えられる。

【話合い】

教師がデジタル機器で意見を確認しながら意図的に指名し、発言させたが、教師と児童のやりとりが繰り返すことになっていた。複数人を指名したことで多様な意見に触れられる機会となっていたが、児童間の話合いは不十分であったと考えられる。

< 検証授業 2 : 第 4 学年 >

- (1) 主題名 「社会のきまり」 C 規則の尊重
 (2) ねらい 周りの人のことを考えてルールやマナーを守ることの大切さを理解し、みんなが気持ちよく生活するために、それらを守ろうとする心情を育てる。
 (3) 教材名 「雨のバス停留所」
 (4) 研究の視点

	工夫	手だて
視点 A (問題意識)	【教材等の提示】	導入時にきまりについて考えさせた後に、事前アンケートの結果を示し、身近な学校のきまりはあるが、なかなか守ることができないことがあること（例：「廊下を走ってはいけない」というきまりがあるが、走ってしまう自分がいること）に気付かせる。その上で問い返しを行うことで、児童に問題意識をもたせるようにする。
	【発問】	教材提示後に、心に残った場面を児童にたずねる。「わかる!」「なるほど!」「この行動・言葉いい!」「どうして?」「みんなでここを話し合いたい!」など、5つの視点を基に考え、発表させることで、児童自身の問題意識を生かした思考ができるようにする。また、児童の問題意識を次の発問においても、生かせるようにする。
	【振り返り】	導入時に考えた問いと自己の振り返りに同じ発問をすることで、最初の自分の考えと教材や友達の考えに触れた後の自分の考えを比較する。そして、自己の感じ方や考え方の深まりに気づき、自己の生き方について改めて確認できるようにする。
視点 B (多様)	【整理・共有】	登場人物の自分本意である行動と、ルールやマナーを考えた行動との違いを分類して板書をすることで、自分の考えた立場と正反対の立場を視覚的に理解させ、多角的に自分の考えを深めさせる。 また、自己を振り返る場面では、一人一人の感じ方の違いに触れさせるために、デジタル機器で考えを共有し、自分と似た考えや違う考えを確かめられるようにする。
	【話し合い】	児童の考えた発言に対して、教師が問い返しを行う。問い返すことで、話し合いを活性化させ、自分の考えとの意識のずれから、多様な考え方に触れられるようにする。

(5) 学習指導過程

	主な学習活動 (○発問 ◎中心発問)	◇指導上の留意点 ★評価の視点
導入	1 道徳的価値について考える。 ○ きまりは何のためにありますか。 ・みんなが気持ちよく生活するため。 ・友達と仲良く生活するため。 ・けがなどしないようにするため。	◇きまりについて考えさせることで、道徳的価値について問題意識をもたせる。 ◇事前アンケートの結果を示し、行動する難しさがあることに気付かせる。 【教材等の提示】
	みんなが気持ちよく生活するために大切なことは?	

展 開	<p>2 教材を読んで話し合う。</p> <p>○お話を聞いて、心に残ったことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よし子の行動はよくない。 ・一番にバスに乗りたい気持ちは分かる。 <p>○よし子の行動をどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雨やどりをしている人たちのことを考えていない。自分勝手。 ・雨の日のバスの待ち方のきまりはないから、よし子は正しい行動をしている。 <p>◎よし子さんはお母さんの横顔を見ながら、どんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バスを待っている人たちより先にバスに乗ってはいけなかった。 ・周りの人が気持ちよく過ごすためにも、マナーは大切にしないといけない。 ・マナーを守らないと、たくさんの人に迷惑が掛かる。 <p>3 本時の学習課題について自分の考えをもつ。</p> <p>○みんなが気持ちよく生活するために大切なことはどのようなことでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの人の思いを考えること。 ・マナーを考えること。 ・自分の行動が周りの人に迷惑になっていないか意識すること。 	<p>◇心に残ったマーク（わかる。なるほど。これいい。なんで。ここみんな話したい。）を発表させ、児童の問題意識を確認する。【発問】</p> <p>◇「自分本意の行動か、マナーの大切さを考えた行動なのか」を対比させながら板書をする。【整理・共有】</p> <p>◇問い返しや、ペアでの話し合いを行い、全体で共有する。【話し合い】</p> <p>◇導入時に考えた問いと比較させることで、社会のきまりやマナーの意義を考えさせる。【振り返り】</p> <p>◇デジタル機器に入力した考えを共有し、多様な考えに触れさせる。【整理・共有】</p> <p>★みんなが気持ちよく生活するために大切なことを考えることができたか。（発言・デジタル機器へ入力）</p>
終 末	4 教師の説話を聞く。	

(6) 検証

ア 学習状況

(7) 発問「みんなが気持ちよく生活するために大切なことはどのようなことでしょうか。」におけるワークシートの記述（※本学級児童数 24 人中）

項目	児童数
振り返りにおいて、多様な感じ方や考え方を基に自己を見つめ、これからの課題や目標を見付けようとしていた児童	16 人

【児童の記述内容】

- もしダメなことに気付いたら、自分で考えてルールを守るようにしたいです。
- 廊下を走ってしまうことがあるので、これからはルールを守って走らないように気を付けたいと思いました。
- 自分で考えて行動しないと周りに迷惑が掛かると思います。僕は、みんなが気持ちよく過ごすために、考えて行動したいです。

- いろいろなマナーや常識を知って、それを守っていこうと思いました。
- 親切な気持ちをもてば、人にゆずったりできるから、親切でいたいと思いました。
- 自分の意見や経験を基に、考えを出すことができました。

(イ) 児童の自己評価の結果（※本学級児童数 24 人中）

項目	◎	○	△
① 問題意識をもつことができた（視点Aと関連）	14人	8人	2人
② 友達の考えから気づきがあった（視点Bと関連）	18人	5人	1人

(ウ) 抽出した児童の学習状況

	授業の様子	振り返りの記述
A 児	教材提示後の心に残った場面を振り返る活動では、「これいい」を選択した。「雨の日にルールはないけれど、みんなのことを考えないといけない」の発言にうなずいていた。	「雨のバス停留所だけではなく、いろいろな場所にもルールやマナーが存在し、それらを守っていきたい」
B 児	教材提示後に「いろいろと、なぞなところがあった」と記述した。また、第二及び中心発問では「よし子は悪くない」とつぶやいていた。	「すぐに自分で気付きたい」
C 児	心に残った場面について、「私もよし子と似た経験をしたことがあって、だめなんじゃないかな」と記述していた。第二発問では、「私も前に科学館で経験したことがあって、だめなんじゃないかな」と発言した。	「周りを見たら、細かいことに気を配れる」

イ 考察

【教材等の提示】

事前アンケートの結果を共有し、これまでの経験を想起させるようにしたが、振り返り時に自分の経験と結び付けて記述したのは、3分の1程度の児童であった。効果はあまりなかったと考えられるため、アンケートの内容や提示の有無を検討していく必要がある。

【発問】

抽出児童3名は、教材に対して自分の気づきや思いを表出していたので、問題意識を生かした思考ができていたと考えられ、一定の効果がうかがえる。

【振り返り】

ワークシートの記述で、3分の2程度の児童が、一人一人の目標や課題を記述していた。自分の経験と結び付けてはいないが、これからの自分の行動指標とするような考えをもつことができていたことから、効果的な工夫であると考えられる。

【整理・共有】

児童の自己評価の集計結果より、「友達の考えから気づきがあった（視点Bと関連）」が4分の3程度であった。デジタル機器を活用し、共有した効果であると考えられる。

【話し合い】

中心発問での問い返しにより、話し合いが深まる様子がうかがえた。ワークシートの記述から、多様な感じ方や考え方から、これからの自分の課題や目標について考えることにつながったのではないかと推察する。

< 検証授業 3 : 第 1 学年 >

- (1) 主題名 「ぼくのくにのすてきなところ」 C 国際理解、国際親善
 (2) ねらい 自分たちの異なる文化のよさに気づいて積極的に関わっていこうとする心情を育てる。
 (3) 教材名 「ほかのくにからきたたべもの」
 (4) 研究の視点

	工夫	手だて
視点 A (問題意識)	【教材等の提示】	導入時に給食や家庭等でよく食べる物（児童が好きな物）を提示し、どこの国の料理か予想させることで、ねらいとする道徳的価値について考える構えとする。 また、興味・関心を高め、「もっと知りたい」と、一人一人の問題意識をもたせることにつなげる。
	【発問】	教材提示後に、心に残った場面を児童にたずねる。「びっくり!」「えっ!」「たのしい!」など、四視点を基に考え、発表させることで児童の問題意識を生かし、課題に対して、多面的・多角的に考えていけるようにする。
	【振り返り】	導入では「自分とのつながり」に気付かせる発問、展開では教材を活用して「自分の感じ方を言語化させる発問」や、自分の経験を振り返ることができる「自分のこれからは視点を向ける発問」を行い、児童一人一人が問題意識を生かしながら考えられるようにする。
視点 B (多様)	【整理・共有】	外国の風景や建物等の写真を掲示し、児童の発言を全体の場で引き出す。その後、中心発問「それぞれの国の人たちと、どんな話をしてみたいですか」と問うことで、食べ物以外にも目を向け、外国とつながっていることを理解し、多様な考えをもつことができるようにする。
	【話し合い】	他の国の知りたいことを友達と話し合った後、それぞれの国の人と、どんな話をしてみたいかと問い、また話し合う場を設定する。二度に分けて問うことで、思考を整理したり、話し合う内容を焦点化させたりできる。1年生の発達の段階を考慮し、多様な感じ方・考え方を伝えたり、聞いたりするための手だてとする。

(5) 学習指導過程

	主な学習活動 (○発問◎中心発問)	◇指導上の留意点 ★評価の視点
導入	1 他国の食べ物は何か予想させる。	◇給食や家庭、外食などでよく食べる物（児童の好きな食べ物）を掲示し、他国の食べ物は何か予想させ、興味・関心を高めることで、一人一人の問題意識につなげる。【教材等の提示】、【振り返り】
	ほかのくにのよさをしよう！	

展 開	<p>2 教材「ほかのくにからきたたべもの」を読んで話し合う。 (四視点を掲示する。)</p> <p>○「びっくり!」「えっ?」「たのしい!」「もっとしりたい!」と感じたこと・思ったことは何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カレーが外国のものだった。 ・ナポリタンは日本ではないと思った。 ・いろんな国の料理を知れるから。 <p>○他の国の知りたいことについて友達と話しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の国の人の好きな食べ物 ・おいしい食べ物 ・小学生の遊び ・盛んなスポーツ <p>◎それぞれの国の人たちと、どんな話をしてみたいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達を作りたい。 ・○○を紹介してもらいたい。 	<p>◇教材を通して感じたことを多面的に捉え、多様な感じ方・考え方を共有する。</p> <p>◇四視点(びっくり!/えっ!/たのしい!/もっとしりたい!)で教材を振り返らせる。【発問】</p> <p>◇対立を生まないように、「違う感じ方もあるね」と机間指導しながら、教師が率先して受け止める。</p> <p>◇食べ物以外の外国の風景・建物を掲示し、外国について考えた多様な感じ方を発言させる。【整理・共有】、【話し合い】</p> <p>◇二度に分けて、友達と話し合うことで、思考を整理したり、話し合う内容を焦点化させたりできる。1年生の発達の段階を考慮し、多様な感じ方・考え方を伝えたり、聞いたりするための手だてとする。【振り返り】、【話し合い】</p> <p>★日本と世界のつながりについて、考えているか。(発言)</p>
	<p>3 自分自身の思いや考えを見つめる。</p> <p>○他の国についてどんなことを考えましたか。</p>	<p>◇ワークシートに記入し、発言させる。【振り返り】</p> <p>★自分たちと異なる文化のよさについて考えることができているか。(ワークシート)</p>
終末	4 教師の説話を聞く。	

(6) 検証

ア 学習状況

(ア) 児童の振り返りの状況(※本学級児童数32人中)

項目	児童数
多様な感じ方や考え方をもとに自己を見つめ、これからの課題や目標を見付けようとしている	26人

【児童の記述内容】

- 国によって違いがあり、他の景色や自然をもっと見たいと思いました。
- 遊びを知って、一緒に遊ぶと仲良くなれると思います。
- お店に売っているおいしいものを教えてほしいと思いました。

○他の国の辛い食べ物をもっと知りたいです。

○虫や動物を見付けに行きたいと思いました。

(イ) 児童の自己評価の結果（※本学級児童数 32 人中）

項目	◎	○	△
① 問題意識をもつことができた（視点Aと関連）	24人	8人	0人
② 友達の考えから気付きがあった（視点Bと関連）	20人	8人	4人

(ウ) 抽出した児童の学習状況

	児童について	自己評価の結果	振り返りの記述
A 児	外国から来た食べ物に強い関心を示し、多く挙手する意欲的な姿が見られた。実際に指名して発言する場面も複数あり、他の児童との対話場面ではまだ輪の中に入りきれず、個別で考える時間が中心となっていた。	振り返りの自己評価では、全項目で◎を選択した。	「外国の海の生き物にも会ってみたい」と記述していた。

イ 考察

【教材等の提示】

「いろいろな食べ物」をデジタル機器で掲示することで、児童の興味・関心を引き出すことができた。A児においても、積極的に挙手を行っている様子が見られた。

また、自己評価では、「問題意識をもつことができた（視点Aと関連）」では、4分の3の児童が、◎とした。問題意識をもって学習に向かう姿勢を整えることができたと考えられる。

【発問】

4点の視点が類似していたこともあり、同じような意見が複数出る場面が見られた。問題意識を生かすには、視点ごとの意味の違いを理解させることや、想定される児童の反応を予測するための準備が必要である。

【振り返り】

自己評価の「友達の考えから気付いた（視点Bと関連）」では、◎を付けた児童がもっとも多かった。そのことから、問題意識を生かしながら、自分のこととして考えることができていたと考えられる。

【整理・共有】

抽出児童Aの学習の様子から、他者の意見を確認し、表情豊かに、うなづく様子が見られた。写真を提示し、視覚的に内容を確認させたことは、考える手助けになったと考えられる。

【話合い】

自己評価「友達の考えから気付きがあった（視点Bと関連）」では、約3分の2の児童が「◎」としていた。児童同士の話合いを2回行ったことで、考えが深まったと考えられる。

VI 研究の成果と課題

検証授業と、各部員による授業実践の検証の結果、次のことが明らかになったと考える。

(1) 児童の問題意識を生かす工夫（視点A）

工夫	◎成果 △課題
デジタル機器を活用した教材等の提示 教材等の提示	◎導入時に、主題に係る教材等や発問を工夫することは、学習への興味・関心を引き出し、問題意識を顕在化させることにつながる。 ◎登場人物の心情や判断について考える際、自分の経験を踏まえて考えようとする構えを作り出すことが効果的である。
児童の問題意識を生かした発問の構成 発問	◎児童の問題意識を生かした発問は、児童の問題意識を深めたり、新たな考えに気付いたりすることに、よりつながる。 △児童の問題意識を生かした発問とするには、どのような準備をしておくことがよいか、研究していくことが必要である。
児童が自分の問題意識の振り返り 振り返り	△児童の問題意識を踏まえた振り返りの設定は難しかった。自分の課題や目標を見付けようとする振り返りにするためには、ねらいと内容等を踏まえた問いの工夫が必要である。

(2) 多様な感じ方や考え方に触れさせる手だての工夫（視点B）

工夫	◎成果 △課題
児童の意見を分類・整理し、共有 整理・共有	◎デジタル機器を活用し、他の児童の意見を共有することで、視覚的に理解し、多様な他者の考えを知ることにつながった。 △板書では、考えを対比させるだけではなく、児童が視覚的に多様な考えを捉えやすくなるような工夫を考えていくことが必要である。
目的に応じた話合いの設定 話合い	◎発達の段階に応じて、二人組や、グループといった話合いの場を設定することは、活発な話合いにつながる。その際、状況に応じて、教師が話合いに加わったり、児童に質問したりすることで、一層話合いの質が高まっていく。 △児童の発言を予想した意図的な問い返しを事前に準備することが大切である。

(3) 総括 ～今後の研究課題について～

研究主題「自己の生き方についての考えを深める児童」のもと、児童が主体的に道徳性を養うための指導を行うことで、自らの成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることへとつながっていくことが確認できた。

児童がワークシートに記述した内容からは、課題や目標を見付けようとする姿が見られたとともに、児童によっては、その難しさも再認識することとなった。今回取り上げた5つの工夫が、必ずしも、自分のことを考えるための工夫になるとは限らず、これらの工夫を相互に関連させていくことが重要である。このように考えたときに、例えば、一単位時間における自己の生き方についての考えを深める学習過程や、児童の学習状況を明らかにする検証方法などが、今後の研究課題となっていくことを望む。

人間としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものであり、本研究で明らかになったことを基に指導の改善に努めていく。

令和7年度 教育研究員名簿

小学校・特別の教科 道徳

学校名	職名	氏名
杉並区立荻窪小学校	主任教諭	長谷川 睦
豊島区立椎名町小学校	主任教諭	後藤 菜緒
立川市立柏小学校	主任教諭	徳増 健一
府中市立若松小学校	主任教諭	◎鶴田 友有子
小平市立小平第一小学校	主任教諭	渡部 透
小平市立小平第三小学校	主任教諭	前田 良子
青ヶ島村立青ヶ島小学校	主任教諭	市岡 友紀子

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 伊藤 育美

令和7年度
教育研究員研究報告書
小学校・特別の教科 道徳

令和8年3月

編集 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6869